

論文の内容の要旨

氏名：中 島 英

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：精神疾患における睡眠状態と抑うつ症状との関連

背景

抑うつ症状は、うつ病や双極性障害などの気分障害のみならず、統合失調症や不安障害などにおいても頻繁に認められる。抑うつ症状は、あらゆる精神疾患において QOL 低下や自殺リスク上昇など臨床的に重要な問題と関連することから、注目すべき症候と考えられている。近年、うつ病においては、不眠と抑うつ症状との間に密接な関連があることが明らかにされているとともに、積極的に不眠の改善を図ると抑うつ症状の改善も高まることが報告されている。うつ病以外の精神疾患においても、不眠が抑うつ症状に関連していることが推測されるが、この点を明らかにした研究はない。

目的

本研究は、不眠と抑うつ症状との関連は、うつ病以外の精神疾患においてもみられるという仮説を立て、代表的な精神疾患であるうつ病、統合失調症、双極性障害、不安障害を対象に、睡眠の状態と抑うつ症状との関連を検討することを目的とした。また、統合失調症と不安障害については、抑うつ症状が疾患特異的症状にどのように関連するか検討した。

方法

2017年4月～2018年3月に日本大学医学部附属板橋病院および滋賀医科大学医学部附属病院精神科で実施された「睡眠脳波を用いたうつ病の客観的評価法の実用化に関する研究 多施設共同探索的前向き研究～SEEDs Study 2～」に参加した185名の患者のうち、うつ病患者71名、統合失調症患者25名、双極性障害患者22名、不安障害患者29名の計147名を対象とした。本研究では、SEEDs Study 2で収集されたデータを二次利用した。

睡眠状態は、アテネ不眠尺度および携帯型脳波計で取得された睡眠脳波で評価された。主観的抑うつ症状はベック抑うつ尺度で、客観的抑うつ症状はハミルトンうつ病評価尺度で評価された。疾患毎に、睡眠状態（アテネ不眠尺度で定義した自覚的不眠および睡眠脳波で定義した不眠）と主観的・客観的抑うつ症状との関連を検討した。

統合失調症と不安障害については、それぞれ陽性・陰性症状評価尺度、状態 - 特性不安尺度で評価された重症度と主観的・客観的抑うつ症状との関連を検討した。

結果

全疾患において、自覚的不眠を有する患者は、そうでない患者に比較し、主観的抑うつ症状が強かった。客観的抑うつ症状については、うつ病でのみ自覚的不眠との間に関連を認め、それ以外の疾患では関連を認めなかった。

統合失調症においては、睡眠脳波で定義した不眠を有する患者は、そうでない患者に比較し、主観的抑うつ症状が強かった。うつ病、双極性障害、不安障害においては、睡眠脳波で定義した不眠は、主観的・客観的抑うつ症状いずれとも関連しなかった。

統合失調症では、統合失調症症状が重度になるほど、主観的抑うつ症状が重度であった。不安障害においても、不安障害症状が重度になるほど、主観的抑うつ症状が重度であった。

結語

自覚的不眠と主観的抑うつとの関連は、うつ病に限定されたものではなく、疾患横断的にみられる特徴であることが明らかになった。統合失調症においては、自覚的睡眠感に加え、睡眠脳波によっても抑うつに関連する睡眠の悪化を検出できる可能性が示唆された。統合失調症および不安障害においては、主観的抑うつ症状の重症度が各疾患に特異的な症状の重症度に関連することが明らかとなった。

本研究の結果から、うつ病以外の精神疾患においても不眠への積極的介入により抑うつ症状が軽減し、それによって疾患自体の治療転帰が改善する可能性が推測される。今後、介入研究によってこの点が明らかにされることが期待される。